慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鈴村君を偲んで
Sub Title	In Erinnerung an unseren Kollegen Suzumura
Author	中山, 純(Nakayama, Jun)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.59 (2019.) ,p.133- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鈴村直樹教授追悼記念号 = Sonderheft zum Andenken an Prof. Naoki Suzumura エッセイ=Essays
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20191031-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鈴村君を偲んで

中　山　　純

鈴村君が54歳という若さで亡くなってから一年あまりが経った。経済学部のドイツ語部会の同僚には，まだ心の整理がつかない人もいるだろう。かく言う私も，未だに日吉に行くと例のひげ面に会えるような気がする。出会いの経緯については，偲ぶ会で配布された小冊子に書いたし，塾の同僚だった年月だけでも十分に長い時間を共に過ごしてきたので，今さら彼の外から見える印象について回顧するつもりはない。いわゆる愛されキャラだった鈴村君の追悼号だから，ドイツ語を専門としない方々にも拙文が目に触れることもあるかと思い，少し見方を変えて彼のことを考えてみる。

鈴村君の専門は受動態の研究であった。Genus verbi，動詞の態と呼ばれる事象については，ドイツ語を学ぶときには能動態と受動態として表裏一体になったもののように教わる。この態はアスペクトと呼んだ時代もあったが，現在は専門的にはヴォイスと呼ばれている。このヴォイスはしかし，共通に認められた明確な定義がなく，動詞のどのような事象を態とするかについては様々な意見があり，門外漢にとっては分かり難い。鈴村君がこの領域に関心を持ち，研究対象に選んだ理由と動機は，本人に聞いたことがなかったので分からない。

受動態は学校文法的には行為の主体と対象の入れ替え現象として説明される。昔のドイツ語の教科書には，能動文として Ich mache das Fenster auf.（私は窓を開ける），その受動例として Das Fenster wird von mir aufgemacht.（窓は私によって開けられる）というような文がよく載って

いた。ご丁寧に，能動文の主語は必要があれば受動文の中で von あるいは durch をつけて表すと説明されていた。さすがに最近は，この種の例文を目にすることは少なくなったが，完全に消滅したわけでもなさそうだ。ドイツ語が分からない方のために言うと，この受動文はあり得ない非文法的なものである。もともと能動文と受動文は表裏一体になっているものではなく，まったく別物なのである。上の例では「窓を開ける」という行為において，行為の主体を中心にして述べている文が能動文である。「開ける」という行為の対象になる窓に着目している文が受動文になる。ところが，そこに「私によって」という情報が加われば，「私が窓を開ける」という単純な現象において，なぜ窓のほうに注目しなければならないのかという疑問が沸く。「私が窓を開ける」という現象で，窓のほうが私より重要だということはあり得ない。

上の受動文の von mir を取れば正しい文になるが，これは上の能動文を受動に直したものではない。例えば通りを歩いていたとき，道端の家の窓が内側から突然開けられたときなどの状況を表したものである。誰が窓を開けたのか分からない，あるいは見えないときに用いる。ここが受動の用法の一つのポイントになる。動詞で表される行為の主体が分からないとき，あるいは問題にならないとき，特定する必要がないときに受動態の出番が来る。教科書や参考書には「必要があれば」能動の主語を von や durch をつけて受動で表すとあるが，そもそもほとんどの場合，必要がないから受動態を選択しているのであって，受動文の中で，行為の主体を表す必要がある場合とはいかなる場合なのか説明が必要だ。

ドイツ語には絶対に守らなければならない規則がある。それは，文を作るときには一個の定動詞を必要とするという規則だ。定動詞とは主語の人称と数に合わせて活用した動詞のことである。つまり主語がないと文を作ることができない。欧米言語を母語とする者にとっては，あまりにも当たり前のことなので，言葉を学ぶときに強調されることはない。しかし，日本語を母語とする者にとっては，これは必ずしも当たり前のことではない

ことは知られてきている。受動態は文法上の主語は立てるが，動詞の行為の主体は隠す方法のひとつである。行為とその対象になるものに注目するとき，あるいは行為の主体が不明であるとき，具体的な主体は隠して行為や現象に注目させたいときに用いるのが受動態である。

言語学や特定の言語を研究対象にするときは，研究者自身の言語観が影響するであろうことは想像できる。鈴村君はなぜヴォイスに関心を抱いたのであろうか。彼はドイツ語だけではなく，もう少し視野を広げてデンマーク語などの北欧語の研究もしていた。ドイツ語固有の態構造というよりも，英語などの隣接言語も含めた諸語の研究からヴォイスの仕組みを解き明かす原理を探していたのかもしれない。歴史言語学や応用言語学など言語学にも多様な分野があるが，鈴村君のように現代語を中心に研究している者の最終的な目標は，言語の仕組みの規則を矛盾なく記述するところにある。部分的には成功しても，個別言語でさえも，まして言語全体の運用規則を矛盾なく描くことに成功した理論はまだない。

鈴村君が研究者としてどのような野心を持っていたのか，今では知ることもできない。態の切り替えは，映像表現におけるカットワークやカメラワークに通じるところがある。聞いている者の関心を特定の対象に誘導し，行為の原因になっているものを見えなくすることもできる。誰からも愛される人柄であったことは知っていたが，芯の部分でどのような人物だったのかよく見えないこともあった。いろいろ聞き残したこともあるし，周囲に気遣うことなく自分中心で行動することができたのであれば，どのようなことをしたかったのか受動態の専門家であった彼に尋ねてみたい。今はただ冥福を祈るだけだ。